



ブック

宇佐美氏は、「ハーバード白熱教室」におけるマイケル・サンデル氏の対話方法を批判し、これに問題意識を感じない教育者を憂え、本書で教育学の存在意義を示そうとする。発問とは「この問い以外の問いは考えるな」と指示することであり、その正当性はあるのかと言うのだ。他方、「一方的に、予め用意した内容を音声化する」講義という方法についても、「不合理で無意義な教育方法」と言う。

「話して聞かせるくらいならば、その内容を各自に読ませればいい」と言う。「なぜ、この目標なのか」「この目標だと、なぜこの教材、方法なのか」という自覚と文章化を、氏は教師に求める。

池田氏は、サンデル氏の対話方法を、①口頭でのやりとりに限定されている。②学生には質

対話の害

宇佐美 寛
池田久美子

宇佐美寛、池田久美子

1620円 さくら社
☎03-6272-6715

対話の害

問させない。③学生に考える時間を与えない。④何を考え、何を考えないかの制約条件は氏が一方的に決めるとして、「まるで尋問」と批判する。そして、①紙に書いて示す。②質問させる。③考える時間を十分に与える。④説明責任さえ果たせばあとは自由。という自己の授業方法を対峙させる。

評者は、次のように考える。

対話はソクラテス以来の教育の原点である。しかし、それは「やらせ」による賑やかな見せ物としてではなく、生徒間協働を進め、ものの見方を考え方の枠組みを拡大させるためにある。そこでは、生徒の学習と省察を尊重することが重要になる。また、ワークシートのなかでも、個人のカード書き作業のなかに沈黙考の自己内対話機能が見出される。目標と進行、評価基準に基づいて、あの手のこの手の教育方法を組み合わせることこそ必要なのだろう。

(聖徳大学教授・西村美東士)